茨木市立平田中学校　全国学力・学習状況調査分析結果

令和４年１０月作成

【今年度の結果と取組みについて】

○●国語●○

（領域ごと）

①言葉の特徴や使い方に関する事項	概ね良好な結果であった
②情報の扱い方に関する事項	概ね良好な結果であった
③我が国の言語文化に関する事項	良好な結果であった
④話すこと・聞くこと	概ね良好な結果であった
⑤書くこと	概ね良好な結果であった
⑥読むこと	概ね良好な結果であった

（問題形式）

①選択式	概ね良好な結果であった
②短答式	概ね良好な結果であった
③記述式	概ね良好な結果であった

（無解答率）　概ね良好な結果であった

（その他）

本校の特徴的なことについて

・ほぼすべての設問において全国の平均正答率より高い数値である。
・最も正答率の高かった設問は、行書の特徴を理解しているかを問う内容であった。
・最も無解答率が高かった設問は、自分の考えをわかりやすく伝わるように表現して書く内容であった。正答率は全国より上回っているが、無解答率が全国よりも高かった。

分析

１．全体的な傾向及び全国との比較

全体的な傾向として、概ね良好な結果であった。全国の平均正答率との比較において、「我が国の言語文化に関する事項」の数値が高く、「読むこと」の数値が全国とほぼ同じであった。

２．分析に対する課題

すべての設問において、全国の平均正答率の数値を上回っている。しかし、各項目の中で重要な「読むこと」の数値が全国とほぼ同じであったことや自分の考えを表現する内容の無解答率が高かったことを考えると、難しい内容の文章をじっくり読み解いていく粘り強さ、語彙を増やすことに加え、文脈における意味を捉え、問われていることを正確に読み取り、過不足なく答えを記述する力をつける必要がある。

３．授業での重点的な取組み

自分の考えを伝え合うペアや班での取組みは多く取り入れて授業を構成している。その話し合いで深まった意見を自分の言葉で書いて伝えたり、プレゼンをするなど、さらに一段階深めた取組みや学習をしていく。

○●数学●○

（領域ごと）

①数と式	概ね良好な結果であった
②図形	概ね良好な結果であった
③関数	概ね良好な結果であった
④データの活用	概ね良好な結果であった

（問題形式）

①選択式	概ね良好な結果であった
②短答式	概ね良好な結果であった
③記述式	概ね良好な結果であった

（無解答率） 概ね良好な結果であった

（その他）

本校の特徴的なことについて

・最も正答率の高かった領域・設問はともに「数と式」であり、計算問題など基本的な問題の定着度が高いことが読み取れる。

・全国の平均正答率より大きく上回っている領域は「図形」であり、証明問題の正答率が特に高かった。

・無解答率は全国との比較において、ほとんど差が見られなかったが、記述式問題で全国を上回る設問が見受けられるなど差が見られた。

分析

１．全体的な傾向及び全国との比較

すべての領域において「概ね良好な結果」となり、全国の平均正答率を上回ることが出来た。

２．分析に対する課題

問題文が長くなると、正答率が低くなる傾向がある。文章から「何を問われているのか」「何が必要な情報なのか」を考え課題の解決方法を見通す力や、文章の中から必要な情報を「式」や「図」に置き換え論理的に整理・要約する能力の育成を目指す。

３．授業での重点的な取組み

１，２年生のときの課題であった記述式問題においても、全国の平均正答率を上回ることが出来た。授業で公式などをそのまま使うのではなく、「なぜこうなるのか」をしっかり考え、「次はどうなるのか」と見通しをもち、生徒同士での説明し合う活動を多く取り入れることに今後も取り組み、読解力の育成につなげていく。

○●理科●○

（領域ごと）

①エネルギー	概ね良好な結果であった
②粒子	概ね良好な結果であった
③生命	概ね良好な結果であった
④地球	概ね良好な結果であった

（問題形式）

①選択式	概ね良好な結果であった
②短答式	概ね良好な結果であった
③記述式	概ね良好な結果であった

（無解答率） 概ね良好な結果であった

（その他）

本校の特徴的なことについて

・最も正答率の高かった領域は「生命」で、記述式問題の正答率が特に高く、全国の平均正答率を上回った。

・最も正答率の低かった領域は「エネルギー」で、選択式問題が全国の平均正答率を下回った。

・無解答率は全国との比較において、ほとんど差が見られなかった。しかし、日常生活の中の身近な現象に関する設問は、無解答率が高い傾向にあった。

分析

１．全体的な傾向及び全国との比較

すべての領域、問題形式、無解答率について「概ね良好な結果」であったが、全国との比較において、「生命」以外のすべての領域で、全国の平均正答率を下回った。

２．分析に対する課題

知識・技能の観点の選択式問題の正答率が低かった。特に、学んだ知識を活用する力に課題が見られた。

日頃の授業や課題等で、班活動やペアワークを通して身につけた知識を活用する場面や応用的な問題を解く場面を設ける。

３．授業での重点的な取組み

図や長文が出てくると、出題の意図を理解するのが難しい。このことから、自分の言葉で語句や原理を説明したり、文章で正しく書く力をつけたりする必要がある。そのために、日頃の授業から班活動やペアワークを通して、学習内容を言語化する時間を設け理解度を深めていく。

○●経年比較●○

全体的な傾向についての分析

・ここ数年間大きく変化することがなかった正答率は、昨年度より大きく上回っている。教科別では、国語・数学ともに昨年度より上回っており、少しずつ上昇傾向にあると判断できる。

・無解答率は、ここ数年間減少傾向にあり、初めて全国平均を下回った。

学力高位層と学力低位層、エンパワー層についての分析

・学力高位層は、ここ数年間大きく変化することなく、ほぼ横ばい状態であったが、昨年度より増加している。

・学力低位層は、ここ数年間横ばい状態であったが、昨年度より若干減少している。

・エンパワー層は、昨年度より大きく減少し、学力向上に関する取組みの成果が現れてきていると考えられる。

○●取組み●○

学力向上に関する取組み

Ⅰ．基礎学力・既習事項の定着

① テストⅠ週間前からの学習サポート体制の確立

・学力低位層、特にエンパワー層を底上げする取組みを行う。

・家庭学習の定着化を図るために自己管理能力を身につける取組みを行う。（いま未来手帳・まなびログの活用）

② 定期的に基礎学力に関する授業内テストを実施

・国語は漢字、語句に関する授業内テスト、数学は計算問題の授業内テストを行う。

・授業内テストで一定の基準に達していない生徒対象の学習会を行う。

③ 定期テストの活用

・前もって生徒に出題する単元を予告し、既習事項の復習をさせ、テストの内容に織り込む。

④ 長期休業中の学習会の実施

・国語、数学、英語を中心に取り組む。学力低位層の中でも、課題の大きい生徒に焦点を当てる。

２．言語活動の充実

① 言葉を使って「書く」力を伸ばす取組み（国語科）

・表現の課題を設定し、記述活動に取り組む姿勢を育てる。

② 事柄の特徴を考え、数学的な表現を用いて「説明する」力を伸ばす取組み（数学科）

・条件を変えて考察する場面を設定し、数学的に表現する活動に取り組む姿勢を育てる。

③ 言語能力や読解力、情報活用能力を伸ばす取組み（すべての教科）

・日常の場面で複数の情報から課題を見つけ出し、書いて説明する活動に取り組む姿勢を育てる。

３．授業方法・内容の工夫と改善

① 分割授業の推進（数学科） … スクールサポーターの入り込み

・全学年で行っている習熟度別の分割授業をより早い時期から実施する。

② ペア学習やグループ学習の定着（ユニバーサルデザインを取り入れた授業） ※感染症対策に配慮する

・グループやペアでの学びを組織し、「学びあい」を定着させる授業方法を研究・実践していく。

③ ICT を効果的に活用した授業の推進

・「一斉授業」「個別学習」「協働学習」それぞれの学習場面を相互に組み合わせた学びの場を形成する。

４．学校全体としての取組み

① 朝の帯時間の活用 … 読書タイムとして設定する。テストⅠ週間前は朝学習の時間とする。

② リーディングスキルモデル事業を活用した研究推進体制の確立

・年３回の研究授業を柱に教科会議を有効活用し、読解力などの言語能力等の育成に取り組む。